

日本の社会文化としての中国観を考える

知の市庭

阿部兼也(02/03/10)

21世紀が始まり今年は2年目です。約100年前、日中関係では、政治関係が文化関係との間に大きな隔たりを作り出しながら、急角度の曲がり角を通りつつありました。

イギリスがアヘン戦争を中国に仕掛けて（1840年南京条約、香港租借）以後、欧米先進列国は先を争って中国侵略へと突き進みます。日本は黒船（1853年ペリー来航）以来の体験を経て、欧米列強の脅威を知り、中国と協力・連帯して対抗する必要を痛感し、その手始めとして、日清修好条規を締結（1871年）することにしました。清朝政府はしかし、その間軍事力・統治力の弱さを露呈するばかり、つぎつぎと列国の食いにされ（英仏戦争：1856年、アロー号戦争による天津条約　長江解放・アヘン貿易自由化。愛琿条約：1858年　ロシア黒龍江を国境とする。北京条約：1860年　ロシア沿海州を獲得）、ついには列国による瓜分即ち分割統治すら取り沙汰されるようになります。日本政府はその欧米列強による中国侵略の凄まじさ、清朝政府の腐敗の深刻さを改めて認識し、協力し合える相手ではないと考えを改め、対清外交政策を転換して、日清戦争へと突き進むこととなりました（1894年下関条約　台湾割譲）。日本政府が新たに始めた、列強に伍して中国を侵略する政策は、台湾の次には朝鮮半島や、東北中国の権益を狙い、そのためその地域に力を持つロシアと対立し、ついには日露戦争を起すこととなります（1905年ポーツマス条約　南満州鉄道敷設や日韓併合への布石となる）。

文化関係ではしかし、日本の知識人たちの脳裏には、江戸時代以来の四書・五経の寺子屋教育に培われた中国古典の素養が存在しており、明治になったからとて、それが突如消えてなくなったりはしません。人々は論語・孟子を読み聖賢の教えとして尊重し、その文章を座右銘よろしく身近なものと感じ、中国・中国人を聖賢の国とその人々として、尊敬し敬愛する気持ちを持ちつづけていたのです。

それ故、日本の知識人たちにとってこの時期の中国は、政治上は植民地を獲得する為の侵略対象ですが、文化的には、今しばらく、尊敬すべき伝統や思想・倫理の豊かな国であり続けていたのです。

この文化面で中国を尊重する考えかたは、日本が中国侵略を推進し、各領域での植民地経営・開発を実際に進める局面にあっても、その中で可能な限り中国の自力による開発・近代化を支援しようとする立場をとり、それによって中国との協力・連帯の可能性を追求し続ける考え方となって、命脈を保ち続けます。それは一面では、侵略を美化し合理化する根拠として悪用されますが、一面では文化の生命力でもあったのです。なかでも日本国内では、その生命力が大きな力を発揮します。

日本はその生命力が社会的に維持されている状態で、中国からの留学生・政客・亡命知識人を受け入れる展開となります。1896年清国国費留学生13名が来訪し、嘉納治五郎にまかせられ、嘉納は孔子の尊重者であって、御茶ノ水の聖堂に留学生を帯同し参拝させます。1898年の戊戌の政変では、身の危険を感じた所謂变法派のリーダー達、康有為・梁啓超・章炳麟等や、革命家孫文等がつぎつぎと日本に亡命乃至来訪します。訪日亡命を助けた伊藤

博文は、吉田松陰に陽明学を学び、中国同盟会の組織化を斡旋した宮崎滔天は、徳富蘇峰の大江塾に学びました。陽明学は儒教の古典・漢籍の学問であり、蘇峰等は、英語の勉強の際に、英文に算用数字の返り点送り仮名をつけて読解した世代でした。ともに、漢文即ち中国古典を素読する教育を受け、文章を書く際には漢文書き下し式が最も自然に感じられる世代です。

当時の日本の知識人の間に維持されていた中国文化の生命力が、中国の近代化を側面から援助する発想を導き出し、革命団体の組織化や留学生教育への取り組みや、専門学術の指導、さらには科挙の廃止と表裏をなす中国の新しい学校教育の大綱設定に関する理論的な支援、人材育成機関の設置など、多くの面で有益な交流を積極的に進める活力源ともなったのです。

その後の日中関係がどうなっていったかを、ここで申し述べることは致しません。ただ、その後の歴史の流れの中で、当時の日本の知識人の維持していた文化の生命力は、古典学の系列の内容であり、逆に中国の現実から眼をそらさせてしまうこととなったのは、指摘しておかなければなりません。その為日本社会に急速に広がる中国・中国人蔑視の風潮をも見過ごしにし、中国侵略の政策に対しても無力であり続けることになりました。それ以上のことは、どうかお一人お一人がそれぞれに御想起願います。今後に大事なことは平和の友好交流を、しっかりと進めることにあります。

【他方中国側から一瞥するならば、中国革命同盟が東京で結成されたこと、また革命を鼓吹する出版物を日本で印刷し中国内に流布できたこと、言い換えれば公然たる革命運動が日本で行われたこと、そして多くの青年知識人が日本に留学して人材として育っていったことなど、いずれもが中国の近代化を推進する社会的力となり、辛亥革命やそれ以後の歴史を形成する展開となります。つまり、中国の近代化を本格的に推進するランニングボードの相当部分が、日本のなかで、当初は東京・横浜で、やがては仙台や福岡などの地方都市をもその場として、形成されて行ったのです。そしてそれを側面から、順逆の交差も孕みながらも支援していたのが、日本の知識人の維持していた文化の生命力だったのです。】

約100年前の、日本の知識人が持っていた中国文化の生命力は、乱世には無力化し有害にすらなりましたが、当初には日中関係上積極的で有益な作用を発揮し、【歴史に残る役割を果たしました。】いま我々は、当時の【日本の】知識人が持ちえていた中国文化の生命力に匹敵するような、何らかの中国観を持ちえているのでしょうか。さらには共有し得ているのでしょうか。そしてまた、当時に有益であった中国文化の生命力に関する認識そのものも、共有し得ているのでしょうか。

今後の日中関係がどのような展開になるかはともかくとして、当時の知識人の持っていた中国文化の生命力による歴史的成果、その関連の資料の発掘や遺跡の確認、保存などに向けた調査活動や勉強運動を、手始めに提起してみても如何でしょう。

たとえば、中国同盟会の結成は準備会が赤坂の内田良平宅、結成大会が代議士の坂本金弥宅と伝えられていますが、現在のどこに当たり、どのような状態かなどは、調べてみたいものです。その種の課題はたくさんあります。

是非皆さんのご一考を煩わしたく、申し述べてみました。

以上